

# 第1章 序 言

この資料集は、『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』として編集したものである。すでに上梓している『集成Ⅰ』の続編をなすもので、本集成では総数1,145点を掲載した。うちわけは、第104次調査以降に出土した墨書土器1,088点に加えて、『集成Ⅰ』で掲載できなかった50点を補遺として掲げた。また昭和3年と昭和7年に岸熊吉氏が発掘し、現在溝辺文一氏の保有するもの7点を氏のご好意により掲載した。

平城宮内から出土している墨書土器の総数は、昭和63年度までで、3,000点近くになっている。平城京での原因者負担に伴う発掘調査で出土したものも、すでに1,000点をこえる。『集成Ⅰ』と本集成で報告するものを合わせてもようやく半数をこえた程度である。

本集成も『集成Ⅰ』と同様、文字が読めなくても残画のあるものについてはできるだけ載せる方針をとっている。墨書内容は、官衙名、人名、器名、習書、記号、数字、絵画など、やはり多岐にわたり、また字数も2字以上のものから1字だけのものなどさまざまである。したがって全体をまとめて一律に論することは難しいが、官衙やその付属機関を示す墨書が比較的まとまって出土するなど、地域を限れば、現段階でも意義づけのできるものがあるのも事実である。式部省、兵部省関係のものをはじめ、民厨、蔵人所、などがこの例である。

墨書される土器の種類と器種も多彩であるが、量的な比率を見ると、杯皿類に集中している。鉢・盤まで加えた供膳用食器に書かれた数は、全体の95%以上を占める。平城宮内出土土器の器種別比率は、ふつう、食器が70%前後で、貯蔵・煮沸用の壺甕類でも30%程度は占める。推定第一次大極殿前庭の前面に立つ楼閣S B7802出土の土器は、建物の特殊な性格から食器の比率が格段と高いが、それでも87%程度である。墨書土器の器種別比率が、供膳用食器に一段と偏っていることを示すものであろう。

また年紀の入ったものはきわめてまれだが、なかに天平18年の年紀があるものなど土器の編年を考える上できわめて貴重なものもある。

本資料集の作成は、平城宮跡発掘調査部考古第二調査室と史料調査室が共同して行なったものである。墨書土器の発掘と資料作成過程における討議には調査部の全員があたった。

釈文の作成は、おもに鬼頭清明（現東洋大学教授）が担当し、史料調査室の綾村宏、寺崎保宏、橋本義則、村上隆、館野和己（現奈良市教育委員会文化課長）それに歴史研究室の加藤優がこれを助けた。原稿の執筆、編集の実務は、考古第二調査室の千田剛道、巽淳一郎、玉田芳英の協力のもと、はじめ山崎信二（現文化庁記念物課）が担当し、のちに田辺征夫が引き継いだ。写真撮影は佃幹雄、八幡扶桑があたった。また、実測図などの作成には、小池やよい、葉敦子、大野佳子、南本忍が、コロタイプ用図版の作成には杉本和樹、松田佐由里が協力した。